



江別インター線発掘調査の思い出（Ⅰ）

13区2班 園部 真幸

私が江別市に転入してきたのは昭和53年10月のことでした。高速道路の千歳川架橋工事中に遺跡（江別太遺跡）が見つかったことから、急遽千歳市の発掘現場から呼ばれ、江別市教育委員会の調査員として発掘調査にあたることになりました。

文化財保護法により埋蔵文化財がある土地を土木工事するときは、事前に発掘調査を行い記録保存する必要があります。当時江別市は道路建設や宅地造成などの土地開発が急増していて、埋蔵文化財の保護対策も急務になっていました。

江別太遺跡の調査は江別市にとって最初の本格的な発掘調査でしたが、翌年からはさらに大規模な発掘調査が待っていました。江別インター線の建設工事に伴う発掘調査で、場所は世田豊平川の右岸、5丁目通りから6丁目通りの間です。この辺はちょうど野幌丘陵の北辺にあたり、昭和初年からたびたび研究者による発掘調査が行われた「北海道考古学発祥の地」と言われる場所でした。

調査面積は2か年で約1.2ha。高橋正勝さんほか調査員3名、調査補助員数名、作業員70名の体制で、4月から10月までの間に発掘調査を行い、11月から3月ま

での冬期間に出土品の整理作業と報告書の作成作業を行いました。

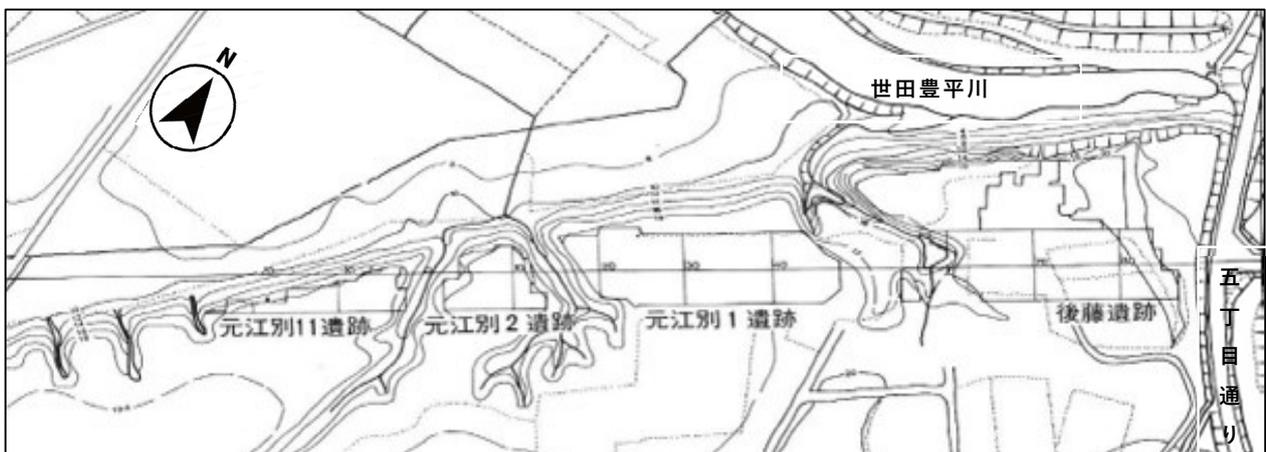
当時この辺りはクマザサが生い茂った未開地のような場所でした。発掘調査と言えば、移植ごてや竹べらでちょこちょこ掘っている風景を思い浮かべる方が多いと思いますが、それはあとの方で最初の作業は大概スコップを使った表土の除去です。重労働の大変な作業ですが、これは主に女性作業員の仕事でした。

各遺跡の間には深い沢が入っていて、樹木も茂っていました。ここは男性作業員の出番で、木を切り倒しその切り出した木を使って階段や橋を作ってもらいました。男性作業員には山仕事や大工仕事の得意な方がいて大変助かりました。

女性の作業員は30～40代が中心で、今考えると若い方ばかりだったのですが、当時は私もまだ20代だったので、「おばさん」と声を掛けて叱られたものでした。

5月の連休明けころになると、表土下の黒色土（黒ボク）の発掘調査も進んできて、しだいに遺跡の内容が見えてくるようになりました。

（続く）



発掘調査の範囲と遺跡名（『元江別遺跡群』江別市教育委員会1981年に加筆）



江別インター線発掘調査の思い出（２）

13区2班 園部 真幸

私が担当したのは元江別1遺跡（前号図参照）でした。昭和54年5月、調査区域の南西側で直径1mほどの円形の土の落ち込みが見つかり、付近から1個体分の潰れた土器が発見されました。

掘っていくと深さ1mほどの穴の底にベンガラ（酸化第二鉄＝赤色顔料として利用される）が敷かれており、石やじり30本と人骨と思われる破片を発見しました。こうした状況からこの穴は明らかにお墓で、土器や石やじりは副葬品と考えられました。

副葬品の土器は続縄文時代（※）前半（約2000年前）に道南地方を中心に広がっていた恵山文化の土器（恵山式土器）でした。江別市内では続縄文時代の土器として江別式土器が古くから知られていましたが、恵山式土器については、それまでまとまった発見例がありませんでした。

恵山文化のお墓は次々に発見され2か年で41基が調査されました。火山灰は酸性土壌のため、人骨はほとんど残っていませんでしたが、お墓の規模から遺体は「屈葬」されたと思われます。

驚いたのは副葬品が実にバラエティに富んでいたことでした。土器をはじめ石やじり、石ナイフ、石斧、管玉（くだたま）、コハク玉などが様々な組み合わせで発見されました。コハク玉は一つのお墓に1千個以上が副葬されていました。

あらたにお墓らしい穴を見つけるたびに、今度はどんな副葬品が入っているのだろうとワクワクしながら掘ったものです。

土器には典型的な恵山式土器のほかに、道央部在来の土器や道東部の特徴を持つ土器もあり、江別を舞台に様々な土器文化が出会っていたことが判ってきました。それは江別式土器文化（約1800年～1500年前）の成り立ちを考える上で大きなヒントとなるものでした。

このように元江別1遺跡の発掘調査は北海道考古学上に大きな成果を残して終了しました。お墓の副葬品4千点余は平成7年6月、国の重要文化財に指定され、現在江別市郷土資料館で保管・展示されています。

（※本州の弥生時代～古墳時代に相当する時代）

（続く）



元江別1遺跡のお墓（左）と副葬品の土器（右）

（『元江別遺跡群』江別市教育委員会1981年より）



江別インター線発掘調査の思い出（3）

13区2班 園部 真幸

江別インター線の発掘調査では、元江別1遺跡以外の調査でも大きな成果がありました。後藤遺跡における古墳の“再発見”です。古墳と言っても天皇陵のような大規模なものではありません。大きいものでも直径6～7m、高さ1mくらいの円形か楕円形の盛土墳です。

後藤遺跡という名称は、最初に古墳を発見した後藤寿一氏（当時札幌市山鼻小学校訓導）に因んで付けられたものです。

後藤氏は昭和6年に豊平川（現・世田豊平川）右岸の台地上で40基余りの古墳を発見、うち16基を調査して盛土下の墓穴から毛抜形刀（けぬきがたとう）、蕨手刀（わらびてとう）などを発掘しています。

後藤氏は翌年恵庭でも同様の古墳を発見し15基を調査していますが、いずれの古墳もすでに土取りや耕作によって消失したものと考えられていました。

昭和55年の夏に近いある日、後藤遺跡の発掘現場を見学に行ったところ、調査担当者の直井孝一さんから土取り跡を精査した面にドーナツ状の黒い落ち込みが表れているのを教えられました。

疑いもなく古墳の周囲を巡る溝（周溝）でした。発掘を進めていくと新たに3基が見つかりました。

何しろ50年ぶりの大発見です。文化庁の調査官や有名な先生方が続々やって来て、調査予定になかった台地の北側についても範囲確認調査を行うことになりました。結果、18基の古墳の周溝が確認されました。

周溝内や周辺からは古墳に関連する土師器（はじき）、須恵器（すえき）、鉄やじり、鋤先（すきさき）、刀身片、紡錘車などが発見されました。いずれも8世紀後半から9世紀に本州で作られ、北海道へ持ち込まれたと考えられるものです。

古墳の被葬者をめぐっては、主に3つの説があります。一つは北海道を支配するためにやってきた律令政権側の人々、一つは律令政府に服属した北海道の部族の有力者たち、一つは北海道に移住してきた東北地方の蝦夷（えみし）の人たちです。論争は研究者の間でまだ続いています。皆さんならどう考えますか？

江別インター線工事予定地内の3基については保存できませんでしたが、範囲確認調査で発見された18基については現状保存の上、平成10年9月に江別古墳群として国の史跡に指定され、史跡公園としての整備が待たれています。（完）



周溝の発掘風景（左）、復元された古墳（右）

（『元江別遺跡群』江別市教育委員会 1981年より）